

Rosario Quarterly Information



広報 ロザリオ

社会福祉法人

ロザリオの聖母会

千葉県旭市野中4017

Tel (0479) 60-0600

ホームページアドレス

<http://www.rosario.jp>

Eメールアドレス

honbu@rosario.jp

第28回(令和元年度)ロザリオ福祉作文コンクール



第28回福祉作文コンクール入賞者のみなさん (令和元年12月7日撮影)

福祉作文全体評

【ロザリオ福祉作文コンクールに応募した

小中学校児童生徒の作品を審査して

す。御協力いただいた学校に感謝申し上げます。

日頃の福祉に対する御指導によって作品に表現された児童生徒の福祉意識はたいへん高く、人間が人間として大事にされるあたたかい社会をめざしていることがはっきりと表現されていることがうかがえます。

ロザリオの聖母会では三〇年前より児童生徒に福祉意識をたかめていただきたいと福祉作文の募集を行って参りましたが、関係者の御努力により大きな成果を収めてありがたく存じております。

今回は小学校十五校八十九作品、中学校七校六十五作品を拝受いたしました。

【作品全体の特色として】

高齢社会の中で身体不自由、認知症症状が目立ち、特に自宅の「おじいさん、おばあさん」の日常生活の不自由さを痛感し、あたたかい介護をしていきたいと願っていることがよく分かります。

作品の中で障害者に対する「差別意識」がありませんでした。「かわいそう」「私は健康でしあわせだが、面倒な人たちだ」という邪魔者扱いが、みられないのはたいへん良いことで日頃の御指導の成果だと考えています。

現在の日本社会が「少子高齢化」に向かっていることを児童生徒は充分認識していて、作品のほとんどは高齢者への接し方、介護の手伝い、認知症高齢者のお世話が多くみられました。未来の日本を担う児童生徒と

してたいへん頼もしいと思いましたが。

福祉施設への見学、ボランティア体験を積極的に実施されている学校も多く、日本の未来に明るい展望がみられたいへんすばらしいと思いました。

ロザリオの聖母会は日本でも有数な福祉施設で、六百余名が行政や地元の御協力をいただきながら日夜活動を続けております。そして更にボランティアの方々も熱心に活動してくださっています。

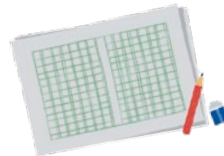
これから尚一層に未来を担う児童生徒に対して「心のあたたかな」「障害を持った人々への関心をたかめ」「人権意識の高い児童生徒であるように」父母の皆様、学校の先生方、施設の職員共々が協力して育てていきたいと願っています。

令和元年十二月

《審査委員》

- 鏑木 正 (銚子市)
- 平山 孝雄 (匝瑳市)
- 松井 安俊 (旭市)

※元教育庁指導主事関係 (五十音順)



4年生選評

○1席 旭市立中央小学校

松野 凜々果さん

【私たちにできること】

「笑顔・会話・お手伝い」が大勢というところがしょうがいのある人に対して大切なことだと気づいてがんばっているのは感心しました。

○2席 旭市立中央小学校

林崎 球仁さん

【大切な弟】

しょうがいのある弟さんでも、国語や算数について、すぐれたところがあつそう。良いところはどんどん伸ばしていくように、おうえんしてください。

○2席 旭市立共和小学校

寺嶋 珀久さん

【ひとつひとつ】

しょうがいのある人に、しんせつに、あたたかい工夫がされていることに気づいてえらいと思えました。ひとつ、ひとつ、相手の身になってお手伝いをしてください。

○2席 旭市立干潟小学校

柴山 陸さん

【ぼくにはあたりまえにできること】

しょうがいのある人や、おとしよりは毎日の生活がとてみたいへんです。お世話してあげるの人は人間として大事なことです。

5年生選評

○2席 旭市立嚶鳴小学校

林 柊斗さん

【命の大切さ】

命の大事なこと、そして体が不自由な人が多くいることを知ってえらなかったですね。その人たちのために、お手伝いすることも大事です。

○3席 旭市立豊畑小学校

浪川 遥斗さん

【楽しかった、はじめてのボランティア】

はじめてボランティアを体験したのはえなかったですね。しょうがいのある人に、あたたかく親切にお世話するのは大事なことです。

○3席 旭市立嚶鳴小学校

小林 莉子さん

【デイサービスに行ってみて】

デイサービスでおじいちゃん、おばあちゃんとふれあえたのはよかったですね。おとしよりにふれあえることは、とても大事です。

○1席 旭市立矢指小学校

實川 航さん

【ぼくが出来る事】

福祉とは「ふだんのくらしをしあわせに」することだと理解しているのはえらいです。

○2席 旭市立中央小学校

佐藤 紗穂さん

【ボランティア体験で学んだこと】

ボランティア体験をしてえらかったですね。認知症についていろいろ知ったのもよかったですね。

○2席 旭市立嚶鳴小学校

飯笹 葉月さん

【交流会に感謝】

シルバーケアセンターの高れい者に琴の演奏を聞いていただいたのはよかったですね。お手伝いをさせてもらった交流会に感謝したのはよかったです。

○3席 旭市立琴田小学校

齊藤 美歩さん

【施設・お宅訪問に行つて】

ふれあい体験によって昔のことをいろいろ知ってよかったですね。

○3席 旭市立富浦小学校

元嶋 亮翔さん

【ぼくが今できること】

福祉・介護について調べたのはえらいですね。障害のある人に寄りそい、お世話しようとしているのはえらいと思います。

○3席 旭市立萬歳小学校

板寺 莉央さん

【祖母をきっかけに考えたこと】

認知症になる高れい者がふえていきます。どのように接したらよいか考えられているのはえらいと思います。



○3席 旭市立嚶鳴小学校

小林 兼斗さん

【わが家の介護体験から】

わが家の介護体験からいろいろ考えたのはえらかったと思います。高れい者のふえた今の日本です。やさしい気持ちで高れい者を見守りたいものです。

6年生選評

○1席 旭市立滝郷小学校

日下 みつきさん

【私とひいばあちゃんの卵焼き】

曾祖母の体のことを考えた料理作りに何度も挑戦しました。人に喜んでもらえる料理作りは大変でしたが、反面楽しさも感じることもできました。また、この経験により、将来母と同じ高齢者と関わられるような仕事に就きたいとまで考えるようになりました。

○2席 銚子市立椎柴小学校

石金 美海さん

【私の弟】

障害のある弟の見方に変化が生じてきました。それは、自分との境遇が同じようなことが書かれている物語に出会ってからです。障害の状況を深く理解するようになり、障害者と自然な形で対応していくことの大切さに気付くようになりました。

○3席 旭市立共和小学校

形野 紗絆さん

【私(こ)ときね(じ)】

病气やげがよって入院生活を送る曾祖父母との関わりが詳しく表現されました。曾祖父母と接する時には、何気ない声かけや相手を理解し支えていくことが大切だということを理解しました。また、そのような働きかけが相手の気持ちを明るくしていくことにも気付くことができました。

○2席 旭市立蓼田小学校
伊藤 莉愛さん

【私の大好きなよし(こ)おばさん】

障害のある大伯母と接する中で、自分にできることは何かを考え、さまざまな取り組みをしています。その経験の中から、障害のある方々に役立つような取り組みはどのようなべきかを考え、自分から進んで実践するようになりました。



○3席 旭市立矢指小学校
船木 結菜さん

【介護をしてみよう】

病気になるた祖母に対し、食べやすい料理を作ったり、時間をかけての食事支援をしたりとさまざまな介護に取り組みました。このことから、常に相手のことを考えて介護することが大切であるということ学びました。

○3席 旭市立嚶鳴小学校

大谷 藍惟さん

【笑顔とやさしさの大切さ】

他人と接する時に大事にしたいことは何かを考えました。介護に携わる母の仕事内容を理解することや自身が他人とふれあう中で、笑顔とやさしさあふれる接し方が大切であるということを知りました。

中学1年生選評

○1席 匝瑳市立野栄中学校
及川 暖斗さん

【障害者と関わってみよう】

施設交流することにより、障害者が自分なりに努力していることや施設職員が優しく支えていることを学び取ることができました。この体験により、体が不自由で困っている人がたくさんいることを知り、将来障害者支援施設で働きたいと思うようになりました。

○2席 旭市立第二中学校

矢澤 結衣さん

【全ての人が安心してくらせる社会】

障害者や高齢者が安心して社会生活が送れるためのバリアフリーのあり方を詳しく調べました。意識バリアに着目し、誰もが心のバリアを取り去り、困っている方に率先して声をかける勇気を持つことの大切さに気付くことができました。

○2席 旭市立飯岡中学校
伊藤 百々寧さん

【みんな家族】

施設での介護体験により、さまざまなことを理解し、将来ホームヘルパーになりたい気持ちを確かなものにすることができました。さらに、社会問題にも目を向け、どのように解決していったらよいかという広い視野に立つようになりしました。

○3席 旭市立第二中学校

平野 瑞樹さん

【貴重な一日】

福祉施設でのさまざまな活動により、障害者との共存のあり方を考えることができました。相手の立場になって考え、勇気を持って手をさしのべるような人になりたと思うようになり、保育士になるという将来の夢に向け頑張っているようとしていきます。

○3席 匝瑳市立野栄中学校

小川 愛望さん

【福祉交流について】

福祉交流で保育所の園児と交流する機会を得ました。当初、交流することの意義を全く感じていませんでしたが、障害をもつ方の苦勞を知ることができ、福祉交流することの大切さを認識するようになりました。

中学2年生選評

○1席 旭市立飯岡中学校

伊藤 優花さん

【笑顔で過ごせる社会】

大好きな曾祖母を家族全員で在宅介護をした様子が詳しく述べられています。私も車いすを押したり、手や足のマッサージを

しました。

その経験をもとに、シル

バーケアセンターで職場体験をしました。その結果、

介護される立場に立ってよ

く考えることが大切だと思いました。

がわかりました。

○2席 匝瑳市立八日市場第一中学校

石井 ひなのさん

【「みっちゃん」と私のお盆】

今年のお盆は、いつものお盆と違っていました。亡くなった大好きな祖母の『みっちゃん』が帰ってくるからです。

『みっちゃん』と過ごした、た

くさんの思い出の中でお盆の迎え火、送り火をたきました。家族の絆がよく表れています。

○2席 旭市立飯岡中学校

常世田 理子さん

【挑戦し続ける力】

『シッティングバレーボール』や谷真海さんの作品『夢を跳ぶ』を通して、挑戦し続ける力は夢や目標から生まれるのだと感じました。

そして、障害を持っているからこそ、知っていること、感じることで、わかることがあるということ

○3席 旭市立飯岡中学校

高野 孝太さん

【福祉という仕事】

福祉関係の仕事についている母親や、亡くなった曾祖母がお世話になった介護士さんの話、デイサービス施設を訪れた経験から福祉という仕事について考えています。

将来は、福祉の仕事のように、辛い、苦しいことの先に達成感が味わえる仕事につきたいと思っています。

○3席 旭市立飯岡中学校

山本 真菜さん

【「介護」とは】

祖父の介護や介護老人保健施設の職場体験を通して、介護は大変な仕事だが、自分でもできることがたくさんあることに気づきました。

このことを将来の仕事に生かしていこうと決意しています。

【妹の障害】

石津 蒼依さん

障害のある妹に対し、心ない言葉が発したり好奇心な目で見たりする周囲の人間の障害者に対する偏見を鋭く指摘しています。障害者と健常者という壁を作らず、互いを尊重することができるといふ世の中にならなことを訴えています。



○3席 旭市立飯岡中学校

神原 光希さん

【大切なもの】

祖母が自宅で曾祖母の介護をする様子が詳しく述べられています。寝たきりの曾祖母は会話もできない病状ですが、祖母は曾祖母に話しかけ、コミュニケーションをとり続けました。

自分も、誰に対しても笑顔でコミュニケーションをとろうと思っています。

中学3年生選評

○1席 匝瑳市立八日市場第一中学校

伊藤 じえるさん

【私ができること】

福祉施設での職業体験学習の様子が生き生きと表現されています。期待と緊張であいさつが思うようにできなかった私。

職業体験学習を通して、福祉とは人のために必要なお手伝いをすること、人が笑顔になれるお手伝

いをする事だと学びました。

○2席 旭市立飯岡中学校

常世田 南海さん

【安心して暮らせる世界】

四世代七人家族の生活を、曾祖父、祖父を通して描いています。

誰もが安心して暮らせるように家族で支え合ったり、福祉施設を利用することを考えています。その時は、介護される人や家族の意向が大切だと述べています。

○2席 旭市立第二中学校

宮内 萌衣さん

【高齢者と私たちの関わり】

高齢者と自分との関わりを、老人ホームの夏祭りでのボランティア体験や自宅での曾祖父との生活から述べています。

電車の中で若い人がスマートフォンに夢中で、立っている老人に席をゆずらなかったことに疑問を呈しています。

○3席 旭市立第二中学校

齊藤 大晃さん

【病室での思い】

曾祖母の入院を通して、現在の介護のあり方に課題を挙げています。

延命処置のあり方や介護の場所を病院や施設にするか、自宅にするか等です。そして、病人本人の意向を最優先すべきだと訴えています。

○3席 旭市立海上中学校

大木 月那さん

【人と人とのつながり】

祖母の入院をきっかけに人々とのつながりを考えました。

病院のエレベーターに乗った時、降りようとした人がドアに挟まれそうになりました。それ以来、率先して開閉ボタンを押すようにしました。相手の立場に立つて接する人が多くなれば、社会全体が幸せになれると述べています。

○3席 銚子市立第六中学校

石金 大空さん

【僕の弟】

障害をもつ弟との生活の中で、さまざまな心の葛藤がありました。

しかし、障害の原因を知ってからは、弟の行動は弟の個性なんだと思えるようになりました。そして、障害を抱えた本人が一番辛い思いをしていることを、多くの人々に知っていただきたいと訴えています。



◆優秀作品紹介◆

私たちにできること

旭市立中央小学校

四年 松野 凜々果

私には、97才になるひいおばあちゃんがいます。去年までは元気に生活でき、私の洗たく物や食事のめんどろを見てくださいました。でも、三月のだん水で転んでしまい、こしを強く打ち、ねたきりのじょうたいになってしまいました。私はいつも元気なひいおばあちゃんを見ていたので、ねているすがたを見て、本当に心配しました。早く元気になってほしいと思つていますが、約半年たった今でも、ねたきりのじょうたいでかわりません。そんな大好きなひいおばあちゃんに私ができることを

考えてみました。

一つ目は、私が笑顔でいることです。私が笑顔でいれば、ひいおばあちゃんも少しは元気がでると思つたからです。

二つ目は、たくさん話しかけることです。たくさん話しかけるとよって、頭をつかったり、おたがいの生活の様子を知らせたりできるからです。このコミュニケーションを通して、ひいおばあちゃんを楽しませることができると、思つたからです。

三つ目は、私にできるお手伝いをする事です。たとえば、2階に食事をもつて行ったり、カーテンや雨戸をしめたり、用事をたのまれたら、すぐにやるように、しています。

四つ目は、なるべく多くそばにいる事です。近くにいて、用事がある時にすぐに話を聞

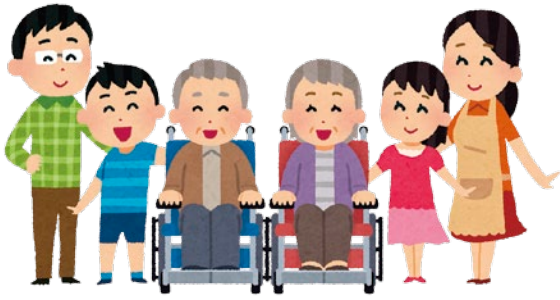
くことができるからです。一人でいるとさびしいと思うので、いっしょにいたら安心感があると思つたからです。

私の考えたことは、とてもかんたんなことです。私は、もし、自分がぎやくの立場だったら、何をしたいかを考えてみることで元気づけられるのではないかと考えました。この考え方は、友だちや家族とのせつし方でも同じことだと思ひます。私は、だれでも想どう力をはたらかせて、「自分が相手の立場だったら」と考えることで、小さなことでも人をよろこばせることが、できると思ひます。でも、私がよろこぶだろうと思つてやつたことが、相手はいやだと思ふこともあるので、なるべく「こうしていい？」と、かくにんをしてからやるように、したいです。

私は、ひいおばあちゃんとせつする中で、うれしい時がたくさんあります。それは、私のことをとてもほめてくれたり、大じょう

ぶ？と心配してくれたりする時です。ひいおばあちゃんが、いつも私たちのことを気にかけて話しかけてくれることでとても元気が出ます。私のおばは、つだぬまに住んでいます。毎週のように、旭まで帰つてきて、ひいおばあちゃんのことを気にかけています。とても心配し、早く元気になってほしいという気もちがよく伝わってきました。私の母も、毎日、顔をだし、話をしています。そばは、おむつのこうかんや、食事のしたくを毎日、やっています。みんなの気もちが重なつて、一日も早く元気になり、長生きしてみんなを、よろこばせてほしいです。

世の中には、ひいおばあちゃんのような、ねたきりのろう人の方や、しよがいのある方などが、たくさんいると、聞いています。みんなが、幸せに長生きできるように、一人一人にできることは、小さいことかもしれないけれど、相手の立場になって考えることが大切だと、思っています。



私は、今度手じゅつをします。一週間、入院する予定ですが、とても不安です。ひいおばあちゃん、毎日このような不安の中で、生活していると思うと、悲しくなります。だから、私たち元気な生活をできる人が、ほんの少しづつでも協力して、病気の人や、しょうがいのある人に、今できることを考え、だれもが楽しく幸せに感じることができるとなると、いいなと思います。これからも、私たちにできることをたくさん考えていきたいと思っています。

ぼくに出来る事

旭市立矢指小学校

五年 實川 航

福祉って何だろう？

「ふ」だんの

「く」らしを

「し」あわせに

福祉とは特定のだけかのためだけではなく、みんなが幸せになれるように取り組む活動や仕組みの事を言うのだそうです。

ぼくは毎日ふつうに暮らしているけれど、病気やケガ、長い年月生きてきて身体の自由がきかなくなってきたご老人など、自分の力だけでは幸せに生活が出来ない人が世の中にはたくさんいます。そんな人達のためにぼくが出来る事は何だろう？そう言えば、母がこんな事を話していたのを思い出しました。

ある日やぶりの雨がふっている日に母が車を走らせていると、道のはしにかさもささずにすわっているおばあちゃんが見えたそうです。母は「こんなに雨がふっているのにどうしたのかしら。」と

思ったそうです。用事を終えてもどつてくると少し場所を変えた所に、またそのおばあちゃんがすわっていたので、母は思い切って声をかけてみたそうです。

「おばあちゃんどうしたの？」

ふり返ったおばあちゃんの顔を見て、母はびっくりしたそうです。おばあちゃんのくちびるが切れて、顔からたくさん血が出ていたそうです。転んでしまったみたいです。母はおばあちゃんにお家

を聞きました。わからなかった事でした。どうやら痴呆の人だったようです。仕方なく母は110番に電話をして救急車を呼んであげたそうです。母は家に帰って来るとすぐにその時の様子を話してくれました。そして気づいた時にすぐ声をかけてあげれば「転ん

でケガをしないですんだかもしれない」と、すぐに声をかけてあげられなかった事を後悔していました。

知らない人に声をかけるといふ事は、とても勇気のいる事です。親切な気持ちで声をかけたのに、逆に怒られる事もあります。けれどもそれで助かる人もたくさんいます。もし、あの時母が声をかけていなかったら、おばあちゃんはどうなっていたのだろう。近くには、川も流れているので落ちてしまうかもしれません。雨の中ずっとぬれていたもので、かぜを引いてしまうかもしれません。母のちよつとした勇気ある行動を、ぼくはエライと思いました。

ぼくの周りには、幸いなことに、かいごを必要としている人はまだいません。でも、町の中には、何かでこまっている人はたくさんいると思います。ぼくは、そうした人たちに声をかけたり、お手伝いしてあげたりする事が出来ると思います。少しはずかしいけ

れど、今度そういう場面にそうぐうした時は、思い切って声をかけてみようと思います。

「だいじょうぶですか？」と優しく聞いてあげようと思います。

世の中のみんなが優しい気持ちでお年よりや助けを必要としている人に声をかけられたらすばらしいと思います。

それから、役所の人には、だれもが安全に生活出来るように町の整備をお願いしたいです。例えば、音の出る信号機を増やしたり、車いすでも道を通れるように歩道のでこぼこを直したり、歩道の幅を広げたりしてもらいたいのです。旭市が見本となって、日本中にだれもが安全にだれもが安全にくらせる町を広げていってもらえたら、ぼくはこの旭市をほこりに思います。



私とひいばあちゃんの卵焼き

旭市立滝郷小学校

六年 日下 みつき

私の家には九十八歳の曾祖母がいます。食えることが大好きで、大体のことは全て自分でできます。そんな曾祖母のことを、私は、「ひいばあちゃん」と呼んでいます。

ひいばあちゃんは戦争を経験していて、物を捨てることや、粗末にすることに對しては、とてもうるさく言います。なので私は少し苦手でした。

私の母は、老人ホームのちゅうぼうで働いています。料理が得意な母は、仕事に行くのが楽しいと言っていました。そんな母を見てるので、私は料理を作ること、食えることも大好きです。

母の職場では、お年寄りのご飯を作るときには、同じ材料を使っ

て、一人一人に合った大きさや形、色合いを考えながら作っていると聞きました。そのことを聞いた時は、とてもおどろいたし、大変そうだなあと思いました。でも、楽しそうに話す母を見て、「私もひいばあちゃんに作ってあげたい」と思い、昨年の夏から私がひいばあちゃんのお昼ご飯の担当になることにしました。

私の得意料理は、卵焼きとカレーライスです。私はしょっぱい卵焼きが大好きなのですが、ひいばあちゃんは、甘い卵焼きが大好きなので、砂糖をたっぷり入れた卵焼きを作ってあげました。初めて作った卵焼きは甘すぎたようで、ひいばあちゃんは食べてくれませんでした。母にそのことを話したら、「甘さだけじゃなく、固さや、大きさも変えてみたら良いんじゃないかな。」

と、教えてくれました。今度は牛乳やみりんを入れて、ふわふわの卵焼きを作り、食べやすいように

小さく切って出してみました。すると、ひいばあちゃんはいつものように、ぺろりと全部食べてくれ、とても喜んでくれました。私はずっともうれしくて家族みんなにも作って食べてもらいました。

次にカレーライスも作ってみました。母にアドバイスをしてもらい、ご飯はやわらかく炊き、野菜は小さめに切り、やわらかくなるよう煮込んでみました。ひいばあちゃんは、おいしそうに二杯も食べてくれました。私はうれしくて一緒に二杯食べました。

このような経験を通して、人に喜んでもらえる料理を作ることは大変だけど、楽しいものなのだ実感しました。そして、ひいばあちゃんのことを苦手だと思っていたけれど、好きな物は好き！とはつきり言うてくれたり、私の料理が一番おいしいと言ってくれたりして、苦手だと思っていた気持ちが消えました。

私は将来、母のようにお年寄りに関わる仕事につきたいと思いま



した。母はいつも笑顔で、どんな人とも仲良くなってしまう、すごいパワーの人です。老人ホームにはいろんな人がいて、料理を作るだけではなく、話を聞いたり、車いすを押したり、頼まれたものを持って行ってあげたりすることもあるそうです。今度、私は母の職場に行つて、福祉についてもっと知りたいと思いました。私も母のように介護をしてあげられる人になりたいです。

障害者と関わってみて

匝瑳市立野栄中学校

一年 及川 暖斗

ぼくは施設交流で、障害者支援施設の「聖マーガレットホーム」に行くことになった。ここには知的障害や、身体障害を抱える方が入所している。

まず最初に、施設の職員さんに対して、どんな印象があるか聞かれた。みんな「暗い人多そう。」や「大変そう。」など、およそ十五個ぐらい意見が出た。どれも障害者に対してマイナスのイメージをもつものだった。

次に、施設の中を見学した。一階には入所者の部屋がいくつかあった。ベッドは空気を入れた特殊素材で、できていた。トイレは、車いすの人でも簡単にできるようにになっていた。その理由は、入所者が八十人いて、歩ける人が

五人ぐらいしかいないからだ。歩ける人は、自分で考えて行動している人がほとんどだという。車いすは、自分が知っていたのは、タイヤがまつすぐのものだけだったが、施設にはリフト式の車いすや、タイヤがななめになっている車いすがあった。話すことができない人は、パソコンのキーボードのようなもので、自分の意思を職員さんに伝えていた。

一階には、食堂があった。ここで、昼になるとたくさんの方が食事をする。リハビリやマッサージをしている人がいた。自動販売機で飲み物を買っている人がいたが、車いすが小さくてボタンがとても押しにくそうだった。

次は施設の利用者さんと一緒にゲームをした。体験したのは、爆弾ゲームとポッチャだ。爆弾ゲームは、丸い糸糸でできた爆弾を音楽に合わせてとなりの人に渡すもので、最後に持っていた人が脱落となる。ポッチャは、最初に白い球を投げて、最後に白い球に近い

人が勝ちた。男子は、ポッチャを順番に体験した。ぼくが戦ったのは車いすの利用者さんだった。その利用者さんは、とても強かったが、ぼくは空気を読まずに勝ってしまった。申し訳無く思っている。

最後に、職員さんから、障害者の印象はどうだったか、もう一度聞かれた。すると、最初は「暗い人多そう。」や「大変そう。」などの意見が多かったけれど、今では、「みんな楽しそう。」や「明るい人が多い。」など、プラスの印象が変わっていた。ぼくたちが来たことを、利用者さんみんなが喜んでくれて、とても嬉しかった。それに、利用者さんは、とても優しかった。最初の偏った意見は、ぼくたちと同じように今の大人にもあって、それが問題になっているのだと思う。障害者だから、と差別される必要は無いし、体が不自由だから全部できないという訳ではないと思う。ぼくの兄も、障害を持っていて、みんなと話し

たり、食べたり、動いたりできる。

まったく同じ人間なんて、絶対に存在しないし、また、それが自分の個性で良いと思う。それを障害者という一言でかたづけてはいけないとぼくは思う。世の中には、色々な意見を持っている人がいる。でも、やはり差別をするのはいけないと思う。

この施設には、体が不自由だったり知的障害をもったりしている方など、たくさんの人がいたが、正直、車いすの方のほうがとても大変だと思っていた。だが、ふつうの人と同じようにしゃべったり、ストレッチをしたりと、色々な事をしていておどろいた。でも、中にはしゃべれず、職員さんに言いたい事を伝えにくい人もいて、かわいそうだと思った。また、たくさんの職員さんがいたが、どの方たちもみんな優しくしていねいに接していた。

これから、重度の障害を持っていての方とは、あまり会う機会がないと思うが、自分がふつうに走っ

たり、しゃべったり、勉強したり、

ご飯を食べたりすることが、できない人がいるということを頭にに入れておきたい。また、その、体が不自由な人を支えている人達も忘れてはいけないと思う。

ぼくは、大人になったら、障害者の支援施設で働きたいと思った。理由は、この見学で体が不自由で困っている人がたくさんいるということを知ったからだ。ぼくもその人たちの手助けをしたい。見学している時、職員さんはとても大変そうだったが、カッコいいと思ったからだ。弱い人を救うヒーローだと思った。

だから、ぼくは支援施設で働きたいと強く思った。



笑顔で過ごせる社会

旭市立飯岡中学校

二年 伊藤 優花

いつも疲れてイライラしている母ですが、おばあちゃんの前ではニコニコと笑顔で幸せそうでした。おばあちゃんも母の顔を見るとニコニコリ幸せそうでした。一年前に亡くなってしまったおばあちゃんですが、ひ孫の私のこととてもかわいがってくれていました。

母が大好きだったおばあちゃん、おじいちゃんと一緒に和菓子屋を営んでいました。昔は休みもなく、寝る時間もほとんどない日もあったそうです。重いものを持つたり、腰を曲げて作業したり、一日中立っていることが多く、おばあちゃんは腰や足を痛がっていました。

一緒に旅行に行っていたおばあ

ちゃんが、段々足を引きずって小

刻みに歩くようになり、「先に行っていないよ」「ここで待っているから行っておいで」というようになりました。次の年は高速道路のサービスエリアで多くの時間を過ごすようになり、目的地の旅館でゆっくりしました。車の乗り降りも時間がかかるようになり、段々誘っても辛いからと行きたがらなくなってしまうました。なんとかみんなで行きたいと、車いすをレンタルに行った時は、私が車いすを押すと「ありがとう」と喜んでくれました。簡単に押せると思っただけど重くて、少しでもこぼこしていると止まってしまい、振動がありました。その度に「大丈夫？」と聞き、車いすを押す人がこんなに気を遣うことや簡単そうに見えて操作が難しいことを初めて知りました。

おばあちゃんが過ごしやすいように家でも玄関に移動式の階段を用意したり、手すりを付けました。ある日、突然動けなくなり、

急いでポータブルトイレを用意し、大人二人がかりで介助していました。布団に寝ても一人では起きられなくなり、介護ベッドも用意しました。夏は暑く、新しいエアコンを設置したり、冬は寒く電気毛布も使っていました。家の中はほとんど変わっていききました。

みんなおばあちゃんのが大好きだったので介護を頑張っていました。夜もほとんど眠れなくなり、体を動かすのにも力を使うので体力的にも辛くなっていました。手も上がらなくなり、自分で食事を食べることも上手にできなくなってきた。スプーンで食べさせてあげたり、飲み物も飲ませてあげたりしていました。足もどんどん腫れてむくみ、しわがなくなり今にも皮膚がはち切れそうでした。みんなで足をさすって血の流れをよくしたり、手のマッサージもしました。

必要となりました。入退院を繰り返しながら私も行ける時にはおばあちゃんに会いに行きました。時には私のことがわからない時もあったり、昔の話を寝言を言っているかのように何度も話していたり、現実と違うことを言ったりしていました。母はわからない話にもこたえたり、ずっと寝ているおばあちゃんに話し続けていました。おばあちゃんには身体だけでなく脳も衰えてしまっていました。どんな様子になっても大切に關わる身内や看護師さんたちの姿を見て温かさを感じました。

私は六月に職場体験で中央病院とシルバークエアセンターに行きました。車いすを押したり髪の毛を乾かしたり荷物をとったり、おばあちゃんのことを思い出しながら優しく丁寧に患者さんに接することが出来ました。もし、おばあちゃんへの介護を見ていなかったら、手伝わいなかつたらどうして良いのかわからなかつたと思えます。そこでは、サイコロを使ってゲームもしていました。数字を掛かけ算したり足し算したり頭の体操になっていたんだと思います。介護職の人もお年寄りのことをいろいろ考えているんだなと思えました。そして私たちにも優しくアドバイスをしてくれました。お年寄りは聞きづらいから話す時は近くに行き、大きな声ではつきり話してあげるように気をつかってあげることが大切ということを教えて頂きました。お年寄りを介護するということはとても大変だということをも身をもって感じるのてきた体験でした。

あたりまえのことができなくなるとは想像以上に辛いことだと思います。だから相手の立場に立って何をしてもらいたいのか、何はしてほしくないのかをよく考えることも大切ということがわかりました。介護をする人、される人が心にゆとりを持ち笑顔で過ごせるように私が今できることをこれからも考えていきたいです。

私ができること

匝瑳市立八日市場第一中学校
三年 伊藤 じえる

福祉とは「社会の多くの人々の幸福」(三省堂辞書より)と書いてある。言葉では理解したつもりだが私にはイメージが出来ない。では、福祉施設とはどんな所だろう。何となく私を感じているイメージだが、弱い人達を助けるための施設なのでは？昨年の夏までそう思っていた。

昨年私は市内の知的障害者施設で職業体験をさせていただいた。施設での仕事の内容に興味があったからだ。「興味がある。」これは半分ウソになる。私は将来看護師になりたいと思っている。だから病院での職業体験を希望しようとしたが、希望人数が多く参加できないと思断念した。心の中がもやもやした。

職業体験の事が決まってから、

この件を家族に話してみた。母は「しようがないんじゃない？みんなの希望が通るわけじゃないんだし。施設だって勉強することいっぱいあるよ」とのんびりした回答を得た。私が聞きたいのはそういうことではない。父にも聞いてみた。「なるほどね。希望が通らないのは残念。でも施設では看護や医療についての体験は出来ないけど、人と人との関わりが学べるんじゃないかな？看護師は看護の学校でたくさん勉強するよね？今しかできないことを体験するいい機会じゃないか」と言われた。そうか、私は今、看護の仕事は体験できないけど、もつと違う何かがある。期待が膨らんだ。

それから私は「福祉」や「知的障害」の事前学習に取り組んだ。一緒に行く同級生とも話し合いを重ねた。パンフレットを読んだり新聞の記事を読んだり、施設で働く父にも話を聞いた。「勉強させてもらうんだから真剣に！失礼の

ないように！」看護師である母の言葉に今までより重みを感じた。

いざ迎えた職業体験の日。期待と緊張であいさつが思うようにできなかつた。施設の中は綺麗で明るかつた。担当の職員さんも優しくそんな人ばかりだった。担当の職員さんが語りかけてくださったが、あいさつをしたものの会話ができない。私は軽くパニックになった。どうしよう。そんな時、職員さんが利用者さんに優しく声をかけてテーブルの方に誘導する姿を目にし私はただぼかんとその動きを眺めるばかりだった。

あんなに勉強してきたのに何もできない。どうしたらいいんだろう。期待は粉々に砕けていたし、緊張は高まるばかりだった。泣きたい気持ちだった。「大丈夫？」と職員さんに声をかけられて周りを見た。みんな元気にあいさつしている。笑顔で話しかけている。話をゆっくり聞いている。利用者さんにあわせて作業している。とにかく明るい雰囲気だった。私に

できることは何だろう。考えた結果、笑顔で元気なあいさつをする。そして返事だ。まず、そこから始めようと思った。作業に参加して利用者さんの話を聞いていくうちに徐々に気持ちがあぐれていった。

私の職業体験は職員さんと利用者さんに支えられて終了した。不甲斐ない気持ちで振り返ってみた時、はっと気がついた。私は「施設の方を助けたい一心で何かをやらなきゃいけない」と思い込んでいたけれど、それは全く違う。利用者さんの幸せや笑顔のために必要なことをすることが大切なのだ。何が必要なかは相手によって全く違う。そのため、相手に耳を傾け、理解しながらお手伝いさせていただく。相手に合わせたお手伝いをさせていただく。そういうことが必要なのだと思いが付いた。同時に、自分の傲慢さに恥ずかしくなった。

福祉とは「社会の多くの人々の幸福」みんなの幸せ。色々な人

がいるから、色々な幸せがある。その幸せのためにできることが多くある。福祉施設、それは人を助けるところではなく、人のために必要なお手伝いをするところ。人が笑顔になれるお手伝いをするところ。職業体験は私にとって貴重な体験と学びの場となった。

進路に向けて本格始動した今、昨年の学びを将来の道、看護師をめざして受験勉強に励もうと思う。



第28回福祉作文コンクール入賞者

小学4年生の部

- 1席 旭市立中央小学校 松野 凜々果
- 2席 旭市立中央小学校 林崎 球仁
- 2席 旭市立共和小学校 寺嶋 珀久
- 2席 旭市立干潟小学校 柴山 陸
- 2席 旭市立嚶鳴小学校 林 柊斗
- 3席 旭市立豊畑小学校 浪川 遥斗
- 3席 旭市立嚶鳴小学校 小林 莉子
- 2席 旭市立矢指小学校 實川 航
- 2席 旭市立中央小学校 佐藤 紗穂

- 2席 旭市立嚶鳴小学校 飯笹 葉月
- 3席 旭市立琴田小学校 齊藤 美歩
- 3席 旭市立富浦小学校 元嶋 亮翔
- 3席 旭市立萬歳小学校 板寺 莉央
- 3席 旭市立嚶鳴小学校 小林 兼斗

- 3席 旭市立嚶鳴小学校 大谷 藍惟

- 2席 旭市立飯岡中学校 常世田 理子
- 3席 旭市立飯岡中学校 高野 孝太
- 3席 旭市立飯岡中学校 山本 真菜
- 3席 旭市立飯岡中学校 神原 光希

中学1年生の部

- 1席 匠瑤市立野栄中学校 及川 暖斗

- 2席 旭市立第二中学校 矢澤 結衣

- 2席 旭市立飯岡中学校 伊藤 百々寧

小学6年生の部

- 1席 旭市立滝郷小学校 日下 みつき

- 2席 銚子市立椎柴小学校 石金 美海

- 2席 旭市立琴田小学校 伊藤 莉愛

- 3席 旭市立共和小学校 形野 紗絆

- 3席 旭市立矢指小学校 船木 結菜

中学2年生の部

- 1席 旭市立飯岡中学校 伊藤 優花

- 2席 匠瑤市立八日市場第二中学校 石井 ひなの

- 3席 匠瑤市立八日市場第一中学校 石金 大空

中学3年生の部

- 1席 匠瑤市立八日市場第一中学校 伊藤 じえる

- 2席 旭市立飯岡中学校 常世田 南海

- 2席 旭市立第二中学校 宮内 萌衣

- 3席 旭市立第二中学校 齊藤 大晃

- 3席 旭市立海上中学校 大木 月那

- 3席 銚子市立第六中学校 石金 大空

医療 保護 施設

海上療養所

訪問看護ステーション

ソフティア

就労継続支援B型事業所

ワークセンター

医療型障害児入所施設・療養介護事業所

聖母療育園

生活介護・児童発達支援・放課後等デイサービス(重点)

聖母通園センター

児童発達支援事業・放課後等デイサービス(相談支援事業)

ロザリオ発達支援センター

児童発達支援事業

旭市子ども発達センター

障害者支援施設

聖マリア園

障害者支援施設

聖家族園

障がい者の就労促進事業所

みんなの家

生活介護事業所

聖家族作業所

共同生活援助事業所

ナザレの家あさひ

高齢者支援事業

ロザリオ高齢者支援センター

通所介護・介護予防通所事業所

ロザリオ訪問介護事業所

障害者支援施設

佐原聖家族園

生活介護・放課後等デイサービス

聖ヨセフつどいの家

共同生活援助事業所

ナザレの家かとり

地域生活支援センター

友の会

中核地域生活支援センター

海匠ネットワーク

香取市相談支援事業

香取障害者支援センター

障害者就業・生活支援センター

香取就業センター



このロゴマークは、師イエズス修道女会 北爪悦子修道女 により作成されました。